

(一)

留吉は四月になれば小学校三年生に進級する。学校は目下春休み中だが、留吉には何の予定も計画もなく、昼食を食べ終わると思いい立って家のすぐ裏手にある山に登り、中腹に拡がる原っぱで大の字になって空を眺めていた。

そこには大きな楠木が何本か繁っていて、強い陽射を避けるため、今日は灌木の茂みを出たすぐ近くにある比較的大きめの楠木の葉陰を選んだ。時としては楠の実の匂いが漂い、った。季節によっては楠の実の匂いが漂い、留吉を和ませた。山では誰も留吉に干渉する者は居なかった。自然の香りがいつも留吉を温かく迎えてくれた。

寒い時期を除き、一年位前から平均すれば月二、三回の頻度で裏山へ登った。山へは最初すぐ上の兄、末吉が小学校に入った頃から

何度か連れて行ってくれた。後は自分で思い立った時出かけて方々を散策し、今ではお気に入りの場所も何箇所か出来た。

町には戦争の傷跡がまだ方々に残っていたが、山にはその跡が無かった。ただ、戦争の名残としては、高射砲が設置してあった頂上への道が市外地としては例外的に舗装され、頂上の見晴らしのいい場所に砲身の取り外された台座が残っていた。それは今でも動かされた。麓に住む留吉にとって身近な山は、いつも何か発見があり、魅力いっぱい遊び場だった。

今日も目に写る雲は形を少しずつ変えながらゆっくり流れていた。枝葉の隙間から漏れる春の陽射しは留吉のおっとりとした顔を優しく包んでくれていて、それだけで本人は幸せな気分になれた。雲は時として動物に見えたり、人間の顔に見えたりした。ある日ウサギに見えた時は、そのウサギには耳が一本し

がなく、留吉はそれをしきりに面白がった。だが、すぐウサギの形は崩れてしまった。今日はどんな動物が見られるのだろうと留吉は期待した。

男ばかり五人兄弟の末っ子のせいか、家族は誰も留吉に関心を持ってないようで、留吉自身も勉強や学校での成績を含め親や兄弟から煩く言われた覚えが殆ど無かった。そのせいかクラスでは下の方ではないが、成績は大きくして良くもなかった。

年の離れた兄弟は滅多に留吉の遊び相手になつてくれず、自ずと独りで行動することに小さい頃から慣れていった。近所の子供達も、大人しく何をやっても反応の遅い留吉と遊びたがらず、その為か単独での行動が増えていた。それでも留吉は苦にならなかつた。

裏山では、季節によつて色々な昆虫や鳥達と留吉は出会え、蟻の行列もしばしば見るこ

とが出来た。蛇は苦手だったが、それ以外の生き物には興味があつた。鳥は自分達の出番の時期が来なければ姿を現さなかつた。カラスと雀は年中見られたが、鶯やメジロは決まつた時期にしか姿を現さなかつた。留吉が名前も知らない尻尾の長い鳥は、水辺にしか来なかつた。山の麓の沢ではカニを見つけないこともあつた。カニが山にいることが留吉には不思議だつた。

蝶やセミの羽化は何度見ても神秘的で、留吉は心を奪われいつまでも眺めていた。自然には発見が幾つもあり、陽が傾くまで裏山で遊んでいても飽きなかつた。野苺や木苺も何処にあるか今では良く知っていて、実がみのる時期には小遣いの少ない留吉のいいおやつだつた。他にも山には季節によつて食べられるものが色々あつた。グミやシイの実は美味しくして留吉は特に好きだつた。喉が渴けば水は沢に降りれば飲めた。山での知識は何度か付き合つてくれたすぐ上の兄から教わつた。

興味のあることはすぐ憶え、道も一度自分が通ったらその後迷うことは一切無かった。自分で発見したことも増えた。山では見違えるように留吉は生き生きと生きて、決して反応の鈍い子供ではなかった。

戦争も数年前に終わり、留吉も小学生になつていた。何より空襲が無くなつたのが子供心にも安心だった。そして山には兄が居なくても、自分だけの判断で登れる歳になつていた。

遠くに聞こえる鶯の鳴き声は、この前聞いた時よりだいぶん上達しているようだった。今日も雲の動きに見飽きると、いつものように留吉は眠ってしまった。

太平洋戦争が終わり、日本の都市部では食べる物を確保することが、生活する上での一
番大事な親の役目だった。留吉の住む町は地
方都市の、鶴の形をした港を半円形に囲んだ
山間部の麓に位置していたが、田んぼや畑に
向く耕作地が少なく、終戦直後には子供達は
いつもお腹を空かせていた。

中心部には空襲の傷跡が方々にまだ残って
いて、当時バラックと呼ばれた急ごしらえの
安価な建物が多く見られた。それでも公共の
足となる市内電車や汽車はレールが破壊され
たにも関わらず、終戦後極めて早い時期に復
旧されていた。バスもすぐに復旧したが、燃
料は木炭だった。近所の発着所で燃料の木炭
を燃やすため、送風のハンドルを回したこと
も何度かあった。親切な車掌だと留吉達にも
やらせてくれた。

破壊された商店や住宅は資材の不足や安定
しない経済のため、本格的復興にはまだ手が

付けられていなかった。

米は国から配給があったが、終戦後はとても家族が食べていくのに充分足りる量ではなかった。闇屋と呼ばれた不法流通が戦後すぐに跋扈してきて、街の通りで木の板と台だけの店を思い思いの場所に開いていた。そこではおにぎりも煙草も金さえ出せば手に入った。それでも買える人は限られていた。

学校の校庭や空き地が急遽耕され、薩摩芋を始め、ありとあらゆる作物が植えられていた。留吉の入学した頃も運動場の一部はまだ麦畑になっていた。留吉の家でも戦後すぐに、狭いが日当たりのいい空き地には素人でも作れる胡瓜やカボチャを栽培していた。トマトを植えた夏もあった。ひと夏でトマトはもう食べたくなかった。それ程トマトは実った。

ただ、港には沿岸で捕れるイワシやアジを始め、魚は戦後比較的早い時期から水揚げされていた。漁船の復旧も早く、魚は留吉の町

では住民の大事な蛋白源だった。クジラは留吉が入学した頃の学校給食の定番で、肉と言えば留吉達にとってクジラを意味していた。

生き延びるのに誰もが必死な時代だった。それでも人々の表情が暗くなかったのは、戦争が終わった安心感からだっただろうか。それとも復興への期待だったのだろうか。沢山の人が死んでも誰もが落ち込まなかったのは、もしかしたら犠牲は自分達だけではないという思いだったのだろうか。それとも人の死に対して日常的なものとして皆が慣れてしまっていたからだろうか。

平和な時代とは人間の感覚も違っていたのかも知れない。或いはその日を必死に生き延びるため、悲しみに浸る心の余裕が無かったせいかもしれない。

留吉は自分の名前が嫌いだった。男六人兄弟の末っ子だが、九歳離れたすぐ上の兄の名前は末吉だった。長じて名前の由来を聞いた時、自分は生まれてこなければ良かったと思つた。もう子供はこれ以上要らない、と親が付けた「末」の字の付く兄の名前は効果なく、その後生まれた子供にはいよいよ最後になるように「留」の字を付けたという。昔は良くあつたことだ。この逸話から留吉は自分が少なくとも親が望んだ子ではなかつたことを何となく理解した。

留吉は小さい頃から感情の起伏をあまり表さず、思ったことを上手く言葉で表現することが出来なかつた。その頃泣くこともあまり無かつた。その為、留吉は知恵遅れだと疑われた時期があつた。親や上の兄達から「愚鈍な子」という蔑みの罵声を浴びたこともあつた。それでも留吉は意に介することなく、二

コニコしていた。何よりも、「愚鈍」という意味が本人には良く分かっていなかった。取り柄は何を言われても怒らないことだった。留吉は目立たない温厚な性格の子供と回りは皆思っていた。

春休みが終わりにかかった頃、留吉の住んでいる集合長屋の空き家に慌しい人の動きと家財の搬入があり、新しい住人が引っ越してきたことが分かった。

空き家になっている家には、半年位前までシカさんという戦争で身内を亡くした老婆が独りで住んでいた。無口な老婆は何故か留吉には顔が会う度に話しかけ、優しくしてくれた。時折、シカさんのふかした芋と一緒に食べたこともあった。買い物用の事を引き受け、小遣いを貰ったことも何度かあった。シカさんは一度だけ昔の写真を留吉に見せてくれた。そこには若い女性が写っていて、それがシカさんだと本人から説明を受けた。

留吉は、シカさんは前からずっと年寄だと思
い込んでいたので、若い頃の写真が不思議な
ものに思えた。写真では古い髪形の着物姿だ
ったが、かなりの美人だった。シカさんは歳
をとっていても品のいい顔立ちと物腰だっ
た。老婆は最初から年寄りではなく、若い娘
時代があったことをその時留吉は学んだ。シ
カさんは自分の境遇については一切話さなか
った。

足の悪いシカさんはあまり外出することも
なかった。そして半年ほど前のある朝、突然
静かに亡くなっていたのが発見された。シカ
さんが死んだことを知り、留吉はその夜食事
が出来なかった。留吉は知り合いを亡くすこ
との悲しみを初めてその時体験した。

三年生になる直前に長屋に引っ越してきた
家族の女の子は、新学期が始まると留吉のク
ラスに編入してきた。当時としては珍しく長
い髪の子で、田舎ではあまり見かけない洗練

された都会風の服装で整った顔立ちをしていた。自分の住んでいる長屋の住人が一躍クラスの人気者になり、留吉も幾らか鼻が高かった。

最初の日、女の子は「野口芙美子です」と自己紹介し、絵と音楽が好きだと言った後で読書も付け加えた。母親と姉との三人暮らしなのもやがて分かった。

留吉の担任は二年の時と同じ吉川教師だった。三十歳前半の男の教師だったが、子供を叱ったことはあまり無かった。それでも生徒達は教師の言うことは素直に聞いていた。

芙美子の転入以来留吉の朝が変わった。母親に起こされなくても自分で早起きし、学校の準備もテキパキとこなすようになった。万年寝坊で、よく遅刻していた留吉にとっては革命的な変化だった。長屋の角で芙美子の出てくるのを待ち、遠くから後ろに付いて学校まで通った。お陰で三年になってから遅刻は

しなくなつた。授業が終わると芙美子が出てくるまで校門で待ち、やはり後ろに付いて家まで帰つた。ただそれだけのことだったが、留吉には毎日が楽しくなつた。

中柄な留吉は席順も偶然芙美子の後ろだつた。付かず離れずの距離で、留吉は芙美子といつも一緒だと思つていた。生まれて初めて実感した、女の子への憧れの感情だつた。それだけで留吉は幸せな気持ちになつていた。山の原っぱで感じる安らぎとは違つた感覚だつた。シカさんと居た時も留吉は安らぎを感じていたが、それとも違つていた。留吉の、時たま出る寝小便の癖も新学期以来治まっていた。

後ろから付いて歩く留吉に芙美子は最初の頃から気が付いていた。前の学校でも彼女は男の子が付いてくるといった、似たような経験をしていたので好きなようにさせておけば

いいと、殆んど無視したような態度だった。留吉は自分から芙美子に話しかけるようなことはせず、ただ黙って遠くから後ろに付いて歩くだけだった。芙美子はそんな留吉を、愛犬を見るような目で見ていた。彼女にはそれでも留吉に対する嫌悪の感情は全く無かった。

教室での留吉は大人しくしているだけで、自分から手を挙げて授業に積極的に参加することはなかった。ノートは持っていたが、意味のあることはそこには書かれてなかった。留吉自身も何故書いたか理解していないことが多かった。

時折、国語の時間に教師が留吉に教科書を読むよう指示することがあった。その時でも留吉は一字毎に拾い読みをし、決してスムーズに読み終わることはなかった。数行読むとクラスに笑いが生じた。いつもの光景だった。

留吉は家で本を読む習慣が無かった。それより教科書以外、本も持っていなかった。試験でも問題を読むのに時間が掛かり、答を書くにはさらに時間を取られ、いつも問題の半分位までしか答えを書けなかった。ただ、書いた答えは全て合っていた。六十点台の成績が留吉の今までの最高記録だった。

そんな留吉に教師は「留吉、本を貸してあげるから読むか？」と声を掛けてくれたが留吉はただ笑っているだけだった。勉強が出来ない訳ではないが、やる気は全くないと教師も諦めていた。しかし、彼も留吉が解いた問題は全て正解だったことは分かっていた。やれば出来る可能性は十分あると教師は理解していた。

留吉は、幸か不幸か家族の誰にも大してかまっていなかった。そのかわり束縛も無く留吉は自由だった。兄達は年が離れていて、

家にある彼らの数少ない本は小学生の留吉には漢字が多すぎて手が出なかった。年相応の本も買っては貰えなかった。終戦当時は皆そうだったが、留吉の家も人並み以上に貧乏だった。

留吉に読書という習慣が無かったのは家庭環境にも原因があったのだろう。予習・復習という習慣も留吉を含め他の兄弟にも全く無かった。それを当たり前だと留吉は思っていた。

芙美子は勉強が出来るだけでなく大らかな性格だったせいにか、すぐクラスの人気者になった。留吉から見れば芙美子は眩い存在で、彼女の近くに居るだけで幸せだった。シカさんが亡くなってから近所に親しい人が居なくなつたが、そこに芙美子が代りに引っ越して来たため留吉は何か不思議な因縁めいたものを感じていた。

ある日、教室で子供同士の諍いがあり、正論を吐く芙美子に難癖を付けた体の大きい餓鬼大将の国本喜一がいきり立っていた。様子を見ていた留吉は、喜一の剣幕にも関わらず敢然と一人で立ち向かった。それまで大人しただけで存在感の無かった留吉が、餓鬼大将の喜一に楯突いたためクラスは一時騒然となった。思いがけない留吉の反乱だったが争いはすぐ納まった。喜一は留吉の目に宿る、秘めた激情を本能的に察して矛を収めた。彼も留吉の迫力に黙って手を引かざるを得なかったのだろう。留吉はその時、何も恐れていなかった。

「何故いつも付いてくるの？」と、その日校門を出た直後、足を止めた芙美子に突然聞かれて留吉は返事に詰まった。留吉は良く考えもせず「いやか？」と問い返した。

「いやではないけど、毎日付いてくるから

聞いてみたのよ」

留吉は学校でも、それまで殆んど芙美子と話したことはなかった。それでも一月近く黙って後を付いて歩くと、何故か留吉は芙美子と話をしていたような気になっていた。

黙っている留吉に、「今日は有難う。後で家へおいで」と芙美子は思いがけない提案をしてきた。今日学校であったことと関係あるのか留吉は思索した。ただ、芙美子の申し出には単純に舞い上がった。喜びが体中を一瞬で駆け巡り、顔の表情が変わるのが自分でも実感出来た。

いつもは後ろに付いて歩いていたが、その日は並んで帰った。自分から話しかける話題は何も無く、ただ時折芙美子の横顔を見るだけだった。それでも留吉には、帰り道が喜び溢れるものになっていた。

あの日から、同級生の留吉を見る目が変わった。留吉はクラスで殆んど無視されていた

が、餓鬼大将の喜一に独りで立ち向かっていったためクラスの仲間から一目置かれるようになった。それまで誰も喜一に齒向かう者は居なかった。

芙美子とも自然と会話が増えた。学校へ行き帰りには今では並んで歩いて、話の主導権はまだ芙美子にあった。

諍いのあった日、芙美子は留吉を自宅に招き、「イソップ物語」と書いてある分厚い立派な本を貸してくれた。芙美子の本棚には沢山の本が並んでいた。隣の姉の本棚にはもつと沢山の本が並んでいた。姉妹共、本を読むのが好きだと芙美子は説明した。

「ちゃんと読んでね」という芙美子の言葉に留吉は黙って頷いた。芙美子との約束はどんなことでも守るつもりだった。

そして芙美子と約束した通り、その本を繰り返し返し、何度も読んだ。教科書以外で初めて読む本だった。キリギリスや蟻が出てきて昆

虫の好きな留吉には面白かった。何度も読み返している内にある時、留吉は声を出さないので本を読んでいる自分に気が付いた。

最初は一字一字拾って声に出して読んでいたが、やがて同級生と同じようにすらすらと読めるようになっていた。留吉は単純に、書いてあることを覚えたせいだと思った。

試しに国語の教科書を読んでみたら、それもすらすらと読めるようになっていた。その内、声に出さなくても本を読めるようになってた。読む早さも前と比べれば比較にならない位上達していた。

留吉は一月程の間に、急速な進歩を遂げた自分に驚いていた。芙美子に前の本を返し、別な本をねだった。芙美子は三年生に相応しい本を選んでくれた。今度は一週間程で読み終わり、別の本を又ねだった。

留吉が喜一と対決した件も教師は知っている

た。日常的なもめ事は子供達の解決に任せ
て、彼は口を出さなかった。それでも留吉の
反乱は教師にとって以外だった。

あれ以来、留吉の授業態度に変化が出てき
たことを教師は気が付いていた。子供は何か
のきっかけで大きく変わることを経験的に知
っていたが、留吉の場合は劇的だった。

留吉が目覚めたとき教師は認識していた。宿
題も必ずやってくるようになったし、本を読
む時、いつの間にか一字一字の拾い読みもし
なくなっていた。何より、授業中の目の輝き
が前とは違ってきた。

級友にからかわれたにも関わらず、留吉は
相変わらず芙美子を毎朝、長屋の角で待ち、
下校時も校門で待って一緒に帰っていた。前
と変わったのは歩く時、横に並び芙美子と対
等に会話をするようになったことだった。

本を借りる回数もその後増え、読み終わる
時間も段々早くなった。芙美子はまだ充分に

留吉に貸す本を持っていた。留吉の進歩は早く、借りた本が増えると同時に知識も増えていった。留吉にとってその頃には、読書は面白いものになっていた。何より、本を読むことが好きになっていった。未知のものを知る喜びに目覚めたのだろう。

初夏とも言えるある日、「今度山に登らないか？」という留吉の唐突な申し出に芙美子は一瞬戸惑ったが、すぐ快く受け入れた。

留吉は春先、日曜日の天気の良い日には思い立ってよく山には登っていた。今ではもう汗ばむ季節になっていたが、それも又心地よかった。いつもの中腹の原っぱまでは、子供の足でも小一時間ばかりで登れる距離だった。

約束の日曜日に二人は出掛けた。留吉は朝早くから起き出し、落ち着かなかった。待合せは長屋のいつもの角で朝十時だった。舗装した本道ではないが、留吉の通い慣れた獣道みたいな近道を二人は潜り抜けて山に登った。険しい坂では芙美子に手を貸した。初めて握った芙美子の手がとても柔らかで、手を離すのが惜しかった。

額に汗を流して芙美子は懸命に留吉に付いて来た。山に登る時の主導権は先導する留吉

にあつた。

「留ちゃん元気だね」と芙美子は留吉の健脚を褒めた。いつもよりペースを落として歩く留吉は芙美子に褒められて少し照れた。留吉の額には汗一つまだ無かった。

灌木の雑木林を出たところで突然二人の目の前に野原が広がってきた。なだらかな斜面になつていて、そこに立つと港や街が見下ろせた。何本かある楠木の一番大きなのを選び、日陰になつた場所に二人は並んで腰を下ろした。

その木に登ると学校や長屋が見えるのを知つていたが、女の芙美子には勧めなかつた。「俺、今年の春先には毎週のようにここに来てたんだよ」と留吉は説明した。芙美子と二人きりで、お気に入り木の下の下で語らつているのが現実とは思えなかつた。思い切つて誘つて良かったと心から思った。

「いいとこね。留ちゃんここまで一人で来

てたの？」、芙美子の問いに留吉は黙って頷き、「俺、友達もあまり居ないし」、と下を向いて囁いた。確かにこの原っぱは留吉の心安らぐ場所だった。何処に居ても存在感の無かった留吉は、唯一山では活き活きとして心が安らいだ。誰も指図しないし、他人と比べられることもない。これと言って取り柄のなかった留吉も、ここでは誰からも束縛されず、自由に振る舞えた。

留吉自身、何事においても他人と競争しよ うという意欲は起きなかった。何故、皆が成績に拘るのかも理解出来なかった。友達が居なくても留吉は山に独りで来て幸せだった。学校で競争に負けても気にならなかった。誰にも迷惑掛けてないし、成績が良くななくても生きていくには何の障害にもならなかった。親から成績のことで何か言われたこともなかった。

芙美子は山での留吉の行動には、めりはりがあり、身のこなしが機敏なことに感心して

いた。学校でのんびりしている留吉とは人が違ってみえた。留吉の隠れた一面を芙美子は見ることが出来た。

「留ちゃん、山では何でもテキパキ出来るのにどうして学校では何をやるのにも遅いの？」

芙美子は餓鬼大将との一件以来留吉を見直して、それだけに歯がゆい思いを持っていた。やれば留吉は出来るという確信が芙美子に湧いていた。

「前からそうだったし、人と競争する気も無いから」

留吉はいつもの人のいい笑顔で答えた。兄達とは年が離れていて、家では競争と言う気持さえ起きたことがなかった。性格も攻撃的などこは一切無く、少々のことには黙って受け止めた。喜一の攻撃対象が芙美子でなかったら、留吉はおそらくあの時も黙って見過ごしていただろう。

留吉の判断基準に他人との比較という観点

は抜けていた。家でたまに手にする自分の果物はいつも兄達の選んだ後の残り物で、一番小さくみすばらしいものだった。留吉は長い習慣から、それを当たり前のこととして受け入れていた。不満に思ったことさえ無かった。

生き物として必要なエゴが留吉には備わっていなかっただろう。人の先頭や上に立とうと思ったことも無かった。

「留ちゃん、やればもつと出来るのだから頑張ってみたら」

芙美子の助言は何より留吉にとって効果があった。芙美子がそう言うのならやってみようという気が留吉に起きてきた。

濃くなりかけた緑の草原は近づく本格的な夏への準備を始めていた。空の雲は春頃と比べて厚みを増し、随分たくましくなっていた。入道雲ももうすぐだろう、と留吉は思った。

その時、留吉の中にも何かへの準備が始ま

ろ
う
と
し
て
い
た
。

留吉は芙美子との日々を昨日の出来事のように鮮明に覚えている。初めて山に案内した時、暫くとはいえ芙美子を独占出来た幸福感に満たされた思いもあった。

夏休みのある日、山陰にある小さな湖で二人泳いだことも忘れられない思い出として残っている。裸で泳いでいる留吉が誘っても芙美子は最初躊躇したが、思い切って裸になり水の中に入ってきた。「こつちを見ないでよ」と芙美子は大きな声を出した。

芙美子は上手く泳げず、浅いところで遊んでいた。留吉も深いところは自信が無く、背の届く範囲で泳いだ。あの当時、留吉は犬掻きしか出来なかった。色の白い芙美子が山を降りた時、陽に焼けて赤くなっていた姿が未だに留吉には鮮明に蘇る。

山へはその後クラスの子も誘って留吉は何度も登った。山頂まで皆で挑戦したこともあった。留吉は山ではクラスのヒーローだった。

た。

留吉にとって芙美子との日々は、今や半世紀以上も前のことになっている。芙美子に出会わなかったら、おそらく今日の留吉はなかっただろう。過ぎ去った少年時代の日々が今や留吉にとって大事な宝物になっていた。色白で目鼻立ちのくつきりした美少女に留吉は単純に憧れた。どう自分を表現したらいいのか分からず、最初は登下校の際、ただ黙って後を付いて歩いていただけだった。

当時、眠っていた留吉の能力に本人自身も気が付いていなかった。全てに鈍臭かった留吉は、学ぶことの面白さを芙美子に間接的に読書という方法で教えられた。また、憧れの芙美子に励まされたのが彼のやる気を起させたのだろう。一連の出来事が偶然の結果だったとしても、留吉は芙美子に感謝していた。人生に岐路があるとしたら、正に長屋の角で芙美子を待った最初の朝に留吉は辿り着くだろう。

留吉の変化は成績にやがて表れてきた。夏休みの読書は確実に留吉の学ぶ基礎を作ってくれたようだ。芙美子の助言で今まで遅れていた勉強を取り戻すため、休み中留吉は二年の教科書を取り出し丹念に復習してみた。じっくり読めばどの科目も殆どが理解出来た。分からない時は芙美子に聞いた。学ぶことが読書と同じく面白くなっていった。時として算数の問題を芙美子が用意してくれた。芙美子の出題は段々と難しくなっていたが、留吉は付いて行けた。留吉としては正に充実した夏休みだった。二年・三年の教科書を全て読み返し、三年の秋口以降に始まる範囲も既に理解していた。小学校低学年で学ぶことはそんなに量的には多くはなかったし、ひと夏真剣に通り組んだおかげで留吉はみんなに追いつき、そして追い越していた。

国語の漢字書き取り試験では三年の後期には百点取るのが留吉にとって当たり前になり、算数でもクラスのトップレベルに躍り出てきた。留吉にも自分に何が起きたかよく分からなかったが、夏休み中の復習が勉強に対する取り組み方を教えてくれたような気がしていた。それでも本を読む習慣が出来たのが一番のきっかけだと自分なりに思っていた。漢字の書き取り試験は予習さえすれば簡単だった。それまで留吉には予習の習慣とやる気が無かった。算数も基本さえ理解すれば難しい科目ではなくなった。自分がやる気になれば成績は上がるのが自ずと分かった。留吉はその当たり前前に今まで挑戦しなかっただけだった。

三年の後半には芙美子の三歳上の姉からも本を貸して貰うようになり、それにも十分に付いてゆけた。ジャンルを問わず読み漁るうち、何より読書が留吉にとって楽しいものに

なったのがさらなる向学心に火を点けたのだらう。芙美子は要らなくなった姉の国語辞典を留吉にプレゼントしてくれた。そして辞典の引き方も教えてくれた。

元々、留吉には勉強という意味が分つてなかった。学校で教わる教科で、興味があるものには熱心に授業を聞くこともあったが、普段は漠然と教師の言うことを聞いていただけだった。自分から家で教科書を開いたり、復習したりすることなどそれまで皆無だった。勉強とは、何をどうすればいいのか、留吉には分つていなかった。読書によって未知なものへの知的好奇心が生まれたことで、連鎖的に全ての教科が留吉には面白くなっていった。そして学ぶということの意味もすこしずつ分つてきた。小学校低学年での目覚めは、級友に追い付く時間が充分にあった。その気になれば成果が付いて来ることも留吉は満足を感じた。達成感を初めて自覚したのもそ

の頃だった。分からないことや曖昧なことを
其の儘にしておかないことが肝心だった。分
かると次への興味が自然と湧いてきた。
勉強に自信が付くと、留吉にとって毎日が
楽しいものとなり、何事にも積極的に立ち向
かうようになっていた。留吉自身は、成績は
さほど気にしていなかったが、結果として格
段に良くなっていた。そのことを本人より
芙美子が一番喜んでくれた。留吉には姉のよ
うな存在だった芙美子が三年の後半ではより
近づいた気がした。

留吉の奇跡は学校でも有名になり、別のク
ラスから留吉を見にくる生徒もいた。
誰もが留吉の存在を認め、かつてのように
無視する級友は居なくなった。餓鬼大将の喜
一も留吉の急成長に敬意を払い、今までのよ
うな横柄な態度を取らなくなっていた。

「イソップ物語」から始まり、内外の偉人
の伝記物を読む頃には、確かに留吉の中に芽

生えるものがあつた。知ることの面白さに気が付き、偉人達の子供時代のエピソードを読む時には自分との比較を常に試みていた。子供なりの価値観が生まれ、明確な方向が少しずつ見えてきたのだろう。

当時の本の漢字には殆どルビ（仮名）が振ってあり、難しい字や分からない漢字は芙美子に貰った辞典で調べた。

留吉も、ただ何となく生きている自分に子供ながら疑問を持ち始めていた。芙美子のためとはいえ、大柄な喜一に立ち向かったのも留吉を変えるきっかけになった。正しいことをやり遂げる勇氣も芙美子のお陰で学べた。

自分を客観的に見ることで至らない点に気が付くようになった。目先のことを何となくやり過ごす今までの自分に疑問を持つようになった。もなっていた。「これでいいのだろうか？」という自分に対する問い掛けから全てが始まったようだ。新しい目で見ると、留吉には発

見が幾らでもあった。本を読むことも学ぶことも留吉には今では楽しいことになっていった。芙美子が見てくれているという意識も留吉の大きな心の支えとなり、次への挑戦を楽しみに変えていた。

三年生終了の時、留吉は芙美子と共に優等生の賞状を貰った。五十五人居るクラスで賞状を貰ったのは三人しか居なかった。クラスの皆が驚いたが留吉はやれば出来るという、級友のいい目標にもなった。教師は留吉のお陰でクラスに活気が出てきていることを嬉しく思っていた。

留吉の友達が一年で随分増えていた。

四年生になると留吉はクラスの選挙で級長に選ばれた。芙美子は副級長になった。晴れがましいと同時に、責任も感じた。

新年度早々、つぎはぎだらけの服が気になったが、吉川教師は「何も恥ずかしいことではない」と力強く励ましてくれた。留吉の服は兄達のお下がりで、いずれも大きめだった。

留吉の穏やかな性格は勉強が出来るようになって、でも変わらず、級友は偉ぶらない留吉に敬意の念さえ抱くようになっていた。出来な
い子には自分の経験から、まず易しい本を読む
むことを勧めた。算数は聞きに来た子には親
身になって教えた。芙美子は同じように女子
生徒に率先して勉強への取り組みから指導し
て、同じように本を読むことを勧めた。芙美
子の提案で、各人が要らない本をクラスに持
ちより、必要な子が借りて読めるようにもし

た。本が貴重な時代だった為、他のクラスでも真似をするようになった。

こういった動きが子供主導で出来たことを教師は頼もしく思った。

全てのきっかけは芙美子と留吉にあった。留吉の一年間での変化は他の子供達にもやる気を起こさせた。餓鬼大将の喜一も今では留吉に教えを乞うようになり、分からない問題があると聞きに来た。

教師の吉川は巧まずして起きた教室の変化に驚いた。彼の教師経験の中でも、これだけに劇的に生徒が変わった例は初めてだった。彼がこのクラスを受け持ったのは二年生からだ。だったが、最初はどこにもある騒がしいだけの子供達だった。

最初に芙美子の編入で池に小さな波紋が生じた。頭が良く、可愛い芙美子に男子生徒の好奇の眼が集まり、同じ長屋に住んでいた留吉も彼なりの反応を示した。きっかけは単純だったが、子供達には大きな意味があった

ようだ。留吉の変化が無ければクラスは元のままだったろうし、留吉自身も前のままでは向学心に目覚めることも無かつただろう。或いはたまたま留吉に変化の時期が来ていたのだろうか。

教師は子供達の持つ可能性に今更驚くと同じ時に、先入観での彼らに対する決め付けを反省していた。

何よりの変化は、子供達があらゆることに積極的に立ち向かうようになったことだった。年齢からの成長もあるだろうし、物事をわきまえる学年に入ったことも背景にあるだろう。ただそれだけでは説明の付かない活気がクラスに生まれていた。

子供達には打算も功名心も無かつた。彼らには自分の背丈に合った目標と、ささやかな満足があるだけだった。

留吉の通う小学校では、四年生から六年生まで五月に学校恒例のクラス対抗野球大会が開かれていた。参加希望者で各組チームを作り、留吉達四年生は全四クラスで争った。子供達は持ち寄った少ない野球用具でそれまで放課後勝手に遊んでいたが、正式なチームでの試合経験は無かった。男子生徒の殆どは参加を希望したが、担任教師の最終審査で各組それぞれ十五人が選ばれた。留吉のクラスの子供達も胸を躍らせて教師の発表を聞いた。

「投手(国本)喜一・捕手(烏山)辰男・一塁(川脇)茂夫・二塁(川下)昇・遊撃(田嶋)一典・三塁(種田)留吉・左翼(大山)秀人・中堅(松尾)文雄・右翼(小野)徳治」

次に六名の補欠選手の名前が呼ばれた。「選手も補欠もまだ今後の出来次第で代わることもあるからみんな頑張れよ」

喜びの歓声と落胆の悲鳴が上がった。ただ

子供達も教師の選択には納得していた。皆が
どれだけの腕か子供同士も良く分かっていた
からだ。

バットと軟式のボールはいくらか学校にあ
ったが、グローブは持っている生徒が貸して
くれた。キャッチャーミットとファーストミ
ットは無かったので普通のグローブで代用し
た。キャッチャーのマスクは剣道の面を改良
して作ったものが学校に二つあり、試合では
全チーム同じものを交代で使うことになって
いた。留吉のクラスは当初グローブが七つし
か集まらず、いざとなったら対戦相手から借
りることにした。グローブは半数以上が布製
だった。革製はいずれも戦前からある古い年
代物ばかりだった。

留吉も代表選手に選ばれ、守備機会の多い
三塁を任された。体の大きい餓鬼大将の喜一
は投手に選ばれ、主将も任された。喜一は足
も速くスポーツは万能だった。

教師はひと月後に迫った試合に備え、選ばれた選手全員と補欠にキャッチ・ボールの練習をまず指示した。学校で準備してあるボールでは足りなくて、生徒が手配してボールも、グローブも集めてきた。親から新たに買って貰った子もいた。昼休みや放課後には練習場所を確保するのが大変だった。一応放課後や休日は、全クラス平等に使えるように曜日や時間で運動場の割当が決まっていた。雨さえ降らなければ日曜日でも学校に集まって練習した。芙美子も女の子を連れて日曜日に練習を見に来ることがあった。そんな時は皆張り切って練習に励んだ。

留吉のクラスは毎日単調なキャッチ・ボールの練習を繰り返していた。それだけなら運動場の片隅でいつでも練習出来た。グローブの無い子は素手で練習し、交代でグローブ使うこともあった。

教師の最初の指示はキャッチ・ボールだけで、相手の胸元へ正確にボールを投げ返すこ

とを厳しく指導した。正確に投げて受け止めることが出来たら、次にその動作を素早く繰り返すよう指示した。投げる距離を少しずつ伸ばし、最後には遠投もやらせた。毎日の練習初めは、ランニングと短い距離のキャッチ・ボールからいつも始まった。最初は不確かだった投球や捕球も少しずつ様になり、一週間ばかり過ぎた頃には見違えるようになった。子供達は教師の指示がはっきりしていたので、教師が来られない時でも子供同士でやる練習に何の迷いも無かった。そして自分達の上達も実感できた。まじめが取りえのショートの一典は、当初キャッチ・ボールでは投球が安定していなかったが、人一倍の練習で教師の抜擢に見事応えた。ひ弱に見える一典の隠れた闘志とやる気に教師は最初から期待していた。

次の段階で教師は初めてバットを持たせてくれた。それでも生徒達は、最初は素振りし

かやらせて貰えなかった。教師は力を入れず素直に振り抜くことだけを厳しく命じた。

「遠くへ飛ばそうと思うな。力まず振り抜くことだけ考える。バットは力いっぱい握って振りまわしてはだめだぞ」

ここでも教師の指導は明快だった。バットを短めに持ち、何度も振らせた。この基本が徹底したところで、次は左手一本で振ることを全選手にやらせた。最初は不安定だったが子供達はやがて慣れてきた。バットを片手でも振り抜くことが出来るようになった。体格のいい茂夫は腕力もあって、力いっぱいのスイングになりがちだった。そんな茂夫に教師は「力んだらボールにバットを当てる事が出来ない。まずボールに当てることだ」と根気よく諭した。

これだけの練習を一週間程やらされた。それ以上のことは禁止されていた。キャッチ・ボールとバットの素振りで半月ほど過ぎたが、練習開始前と終わりには必ず運動場三周

のランニングが課題だった。

生徒達は実践ゲームをやりたくて教師に要求したが、教師は「黙って付いて来い」と笑っていた。

「先生、それで勝てるの？」と主将の喜一が聞いたが、教師は「大丈夫」とだけ答えた。

子供達が待ちに待った実戦練習の日が来た。運動場を独占出来る時間は二時間と決まっていた。

ライバルである別のクラスは最初から実戦形式での練習を始めていたので留吉達は少し心配だった。

正選手が一人ずつ打順に立ち、補欠がその守備の穴埋めにまわった。安打を打つとその都度次の打者の守備位置に補欠が駆け付けた。

喜一が平凡な二塁ゴロで一塁に走るのを途中で止めた。ところが一塁への悪送球で喜一

は又走り出した。しかし間一髪間に合わずアウトになった。

「どんな時でも全力疾走しろ。喜一、自分で審判をやるなよ」と教師はたしなめた。

この一件で子供達はどんなプレーでも全力で走るようになった。

初日の実戦形式での練習は短い時間で終わり、教師は順番に一人ずつ打撃の指導をした。試合を想定した練習では教師の言い付けにも関わらず大振りしていた子が多かった。

「試合になってもバットは大振りするな。短めに持って素早く振り抜くだけだ」

教師の言うことは最初と変わらなかった。個人指導のバッティング練習で子供達から次第に力が抜けていくのが見られた。ボールに正しく当てるコツが子供達にも理解出来たのだ。

「運動をやる時決して力んではいけない。投げる時も打つ時も基本は同じだ」

子供達は素直に従った。バットのコントロール

ールが幾らか出来るようになった。当たると力を入れなくても意外とボールが飛ぶことを彼らは体験した。

「先生の言うとおりにしたら、よう飛んだー、ひょうきんなライトの徳治は喜んでいった。力んでばかりいて空振りの多かった徳治はボールが飛んで嬉しかったのだろう。みんな笑いながら頷いた。教師の教えた意味が何となく実感出来たと子供達は思っていた。

留吉は三年の夏まで本格的に野球をやったことがなかった。兄弟でキャチ・ボールをした経験が何度かあるので、投げる事や捕球には最初から違和感なくやれた。むしろ他の生徒より上手かった。吉川教師の言うことには何か意味があると留吉は信じていたので、純でも指導通りに練習を繰り返していた。そんな留吉を見て他の生徒も文句を言わず単調な練習を続けた。

いつの間にか野球でも留吉は中心的存在になっっていた。実戦の打撃でも力まず、ただ一

人最初から鋭い当たりが出ていた。教師の言うとおりに練習したら打てるようになる。皆が少しずつ納得した。喜一やファーストの茂夫も留吉を見習い、軽く振り抜いてボールを打つ練習に励んでいた。効果はやがて全員に少しずつ現れて来た。

子供は競い合って上達する。指導者の適切な指示があれば、その上達も早かった。練習の成果からも、留吉は教師の指導に子供ながら感心した。

大柄な喜一は投げる球にも威力があり、ピッチャーには最適だった。それに力まずバットを振ってもボールは良く飛ぶようになっていた。

教師は野球練習が始まってからの喜一の変化に気が付いていた。今まで餓鬼大将で我儘だったが、チーム全員の面倒を良く見るようになった。特にバッティングの下手な生徒への指導をこまめにやっていた。そんな喜

一に皆が今までの壁を感じなくなっていた。同じ目標を持った時、子供達に連帯感が生まれ協力し合ういい見本だった。今ではクラスの誰も喜一を煙たがらなくなっていた。選手や補欠でなくても練習には誰でも参加出来た。ただ、バッティングは選手優先で、バットを使って無い時は誰でも好きにやれた。これは吉川教師の方針で、クラス対抗の試合でも全員が参加するという一体感を育てるためだった。子供達も自分の役割を心得ていて、選手の邪魔になることは誰もやらなかった。

実戦形式の練習の時、教師は「二人で守れ」という指示を出した。センターに打球が飛んだ時、必ず近くに居る他の外野手にもボールを追わせた。一万が一打球を逸らせた時、カバーする誰かが居ないと傷は深くなる。内野でも同じだ」

教師は色々な例を示して教えてくれた。言われてみれば子供にも納得いく説明だった。「自分が長打で活躍しようと思うな。まずは頭打者は一塁に出る事を考えろ。ランナーが居たらどうやったら次のベースへランナーを進められるか考えろ」喜一に対しては「投手は球を投げ終わったら次にその玉が自分に向かって飛んでくると思え」と教えた。喜一も顔に向かって飛んできた玉に顔を反らせて逃げた経験があったので、教師の言う事は良く理解出来た。自分で最初から構えていれば自分を直撃する玉にも対処出来ると納得した。

教師の指示は具体的で、なぜそうするかも説明してくれた。子供達は実際に出来るかどうかは別として、教師の言うことが良く理解出来た。野球にも色々な発見があることを自覚させられた。今までの単純な遊びと違ったものに野球が思えてきた。

日が経つにつれ練習する子供達の動きには段々と無駄が無くなってきた。子供達は自分は何をやるべきかを考えるようになってきた。打撃練習でも力一杯振りまわす子は居なくなつた。それよりも集合時間を含め、チーム全体で決めたことをきちんと守るようになってきた。練習が終わつた後、今ではボール洗いやバットやグローブの汚れ拭きも誰言うとなくやるようになった。

野球の練習という団体行動が自ずと規律を生み出すことで、子供達は野球以上のことも学んでいた。

試合の結果を含め子供達が思い通り出来るかどうかは別として、何かに取り組む時の姿勢も学んだようだった。

教師の吉川にはそれが一番の満足だった。

公式戦を一週間後に控え、隣の組と練習試合が組まれた。これも子供同士の発案で両ク

ラスの教師は許可した。

喜一の好投もあったが、結果は圧倒的な勝利だった。だが教師は試合後、選手や応援に来ていたクラスの生徒を全員教室に呼び戻し話を始めた。

「今日の試合は練習の成果が表れていて、見事だった。ただ、ここで選手とここに居る全員、先生と約束して欲しい。勝負には勝つこともあれば負けることも当然ある。ヒットを打って嬉しい気持ちは充分に分かるが、打たれた相手のピッチャーが居ることも忘れな

いで貰いたい」
教師は子供たちに言っていることが理解されて

いるか反応を見ながら続けた。
「打たれたり、ボールを取り損なったりした選手は悔しい思いをしている。自分がミスした時にはお前達も同じ気持ちになるだろう。その時あまり喜び過ぎるとミスした相手がより傷付くこともある」

子供達は試合中、素直に喜びを表していた

が、教師は戦っている相手のことも考えろと提案していた。

「喜ぶなどは先生も言わん。ただ、こちらが上手くいった時は相手が困っている時だ。そこを少し考えてやれ。今日お前達に約束して欲しいのはそれだけだ」

言われてみれば確かにヒットを打つたびに大騒ぎをしていた。点数が入ると選手は全員飛び上がって喜んでいった。ヒットを打たれた相手の投手を指さして笑っていた子もいた。子供の自然な反応とも言えるが、教師の“喜び過ぎると相手を傷つけることがある”という説明には全員納得した。

「先生、分かりました。約束するよ」と主将の喜一は立ち上がって力強く言い切った。

留吉のクラスは本番で余裕を持って優勝出来た。選手は教師の言いつけを守り、力まないで投げ、そして打った。守りには常に他の

選手がカバーに入り、逸らした時の準備をしていた。本番で二度ほど見事にその準備が活かされた。また、一塁への全力疾走は相手守備のエラーがらみで徳治がセーフになった。小柄な徳治は、ヒットは打てなかったがいつまでもそれを自慢していた。

圧巻だったのは喜一の投球だった。緩やかに見える体の動きからは想像出来ない速い球が繰り出され、相手選手はバットに当てるのに苦勞していた。

そして、チェンジの度に全力疾走していたのは留吉のクラスだけだった。

芙美子を団長とした応援も見事なものだった。いいプレーに対しては、敵も味方もなかった。教師は全てが芙美子の発案だと後に聞かされた。

教師の吉川は旧制中学で野球部の主将を務めていたことを試合後生徒に説明した。

的確な指導はその経験から生まれたものだ

った。子供達にとって単なる遊びと違って、いた野球は、取り組み方では奥が深く面白い競技だということが良く理解出来た。子供達は自分が今何をやればいいのかを常に考えるようになった。野球は彼らにとって、もう単なる遊びではなくなっていた。

何かに取り組む時、どうしたらいいか自然と考えるようになった。この変化が子供達により深い野球の面白みを教えてくれたようだった。これは運動でも、勉強でも通用する姿勢だった。

野球大会が残してくれたものは、勝ち負けを超えて大きく留吉達の心に刻まれた。そして一番留吉が心を魅かれたのは一人がやれることは自分も出来ると思え。もしかしたらもっと上手くやれるかもしれないと思え。という教師の言葉だった。これは練習の初日に聞かされた。

時の経過が、経験した事柄を美化することもあるだろう。心に刻まれたものが印象深いだけ留吉には芙美子と過ごした、たったの二年間余が五十年以上経った今でも特別な時間としていつまでも残っている。

懂れなのか、淡い恋心なのか取り方は色々あっても、留吉に取って芙美子の存在そのものが時を充実させてくれたことには違いなかった。

それまで漫然と生きていた留吉が芙美子によって目を覚まされ、勧められた本を読むことで視野が広がっていった。全てが連鎖反応的に好転していった。新しい発見が留吉のさらなるやる気を喚起してくれたようだった。野球も指導者によって学ぶことが多いのを子供心に知った。そして上達への道も吉川教師に実践的に教えて貰った。

教室でも、そして野球でも、「何故？」という子供達の疑問に吉川教師は具体的に応え

てくれた。試合では何より対戦した相手に対する気配りを教えて貰ったのは、その後の留吉の生き方に大きな影響を与えた。半世紀以上の時の経過を考えてみても、留吉の中で一番輝いていて忘れられないのが、小学校時代の芙美子と過ごしたあの二年間だった。

遠足や運動会を、それまで他人事のように思って黙って言われた通り付いて行くだけだった留吉が、いつの間にか中心に居て活躍するようになっていた。そのきっかけは芙美子が作ってくれたと今でも思っている。

仕事や人間関係で落ち込んだり、嫌な思いをしたりして気が晴れぬ時、留吉はいつもあの小学生時代を思い起こすようにしていた。あの頃の思い出は心が安らぎ、どんな時でも癒された。自分だけではなく、クラス全員の生き生きとしていた姿が鮮明に蘇る。そんな過去の日に戻ることも触ることも出来ない

が、気持ちだけは当時に戻れた。それが留吉にとって何よりだった。

故郷の山と、小学校から始まった仲間との思い出は深く心に刻まれ、何度も留吉の中でいろいろな場面が繰り返された。そんな時、留吉の顔はほころんでいた。

留吉も今では定年を迎える年代にもう達していた。

芙美子は五年の春、突然転校して行った。北国にある母親の実家に戻るといふ説明が芙美子からあったが、詳しい背景や事情は芙美子にも分からなかった。芙美子は男の子にもてたが、女の子にも人望があり、クラスの皆が驚きそして彼女との別れを悲しんだ。急な引越で、留吉もいくらか手伝った。不要になった芙美子の姉の本や、中学で使う英語の辞書も貰った。最初に借りた「イレゼント」してくれた。発つ前の日に芙美子は封がしてある留吉宛の手紙を渡してくれた。「居なくなってから開けてね」と言う芙美子は、笑顔を装っていたが涙声だった。すぐにでも読みたかったが、留吉は我慢した。

雨の中、駅までクラス全員で見送りに行き、手を振る芙美子の大きな目が涙で一杯だ

ったのがいつまでも留吉には忘れられないで残った。

留吉も芙美子の姿が見えなくなるまで手を大きく振っていたが、やがて涙で全てが霞んできた。

家に帰ると留吉は芙美子から貰った手紙をすぐに開けた。

“留ちゃんいろいろ親切にして頂いてどうも有難う。短い時間だったけど楽しかった。留ちゃんの努力はほんとにすごかったね。これからも山での元気を忘れないでがんばって下さい。裸で泳いだこと誰にも言っちゃだめよ。多分いつか会えるよね。芙美子”

留吉は手紙をどこに仕舞うか一瞬考えて、「イソップ物語」の本に挟んだ。

留吉にはこの時から、この本も手紙も大事な宝物になった。

五年と六年の時クラス替えがあり、野球の仲間もバラバラになっていた。それでも定期的に彼らは集まって練習をしていた。基本的出来たメンバーはすでに小学校のレベルを超えていて、それぞれのクラスでは指導的立場になっていた。吉川教師の教えは基本的な事しか指示しなかったが、あらゆるプレーに対応出来た。

美美子が居なくなったクラスは留吉にとって味気ないものになった。それでも、いつまでも落ち込んでいる訳にはいかなかった。いつも美美子が見ているという気持ちで留吉は勉強も読書も続けた。幼い子供だった留吉が、やがてものを考える少年に変身し、未知の物への好奇心を自分なりに探求していった。考えることは幾らでもあり、見たいものや知りたいことは幾らでも出てきた。美美子は居なくなっただが、充実した日々を送ることは出来た。

留吉は小学校卒業の時、卒業生を代表して答辞を読んだ。順調に成績は伸び、あらゆる点で子供達の模範となった。背も五年生頃から伸び始め、卒業の頃は喜一と変わらない背丈になっていた。

卒業まで留吉を受け持った吉川教師の経験でも、留吉程の急激な進化を見せた生徒はいなかった。留吉は率先して人の嫌がることを引き受けていた。これは彼の生来の気質なのか偉人伝の影響なのかは定かではない。留吉自身貧乏くじには慣れていて、大して精神的負担やストレスにもならなかった。いつも問題を起こす級友の徳治に対しても留吉は寛大で、彼の代わりに迷惑を掛けた仲間には頭を下げていた。徳治は利発では無かったが、将棋だけは強かった。時として平気で嘘をつくため級友の信用は無かった。それでも留吉は皆の前では徳治を信じた振りをして、二人きりの時に諫めていた。担任の教師もそんな

二人の経緯は知らなかった。

留吉達が入学した公立中学校は近隣三校の小学校から生徒が集まり、一学年十二クラスの総勢六百人を超す生徒数だった。当時同級生は殆ど公立中学に通い、クラスの三分の一は同じ小学校の知った顔だった。

四年の時の優勝仲間が中学では野球部に入り、卒業までには殆どがレギュラーになれた。徳治も留吉に付いて野球部に入った。

何より圧巻だったのは、野球部に入った留吉の仲間が一年から四人がレギュラーとして活躍したことだ。三年になったら、かつての仲間七人が主力になり市内中学最強のチームをつくっていた。徳治も補欠ながらチームの一員に残っていた。一典は中学では野球を止めた。皆が勧めたが、一他にやることがある」と言って皆に申し訳なさそうな顔をした。

留吉達の基本に忠実な合理的練習法はその中学野球部の伝統となり、その後も長く後輩

によつて引き継がれた。徳治は卒業後も度々学校に顔を出し、休日にはコーチの役を引き受けていたらしい。彼は自慢げに自分達が植え付けた伝統が健在なのを時折昔の仲間に報告していた。源を辿れば吉川教師の小学四年の時の教えだった。

三年の時、市の大会で留吉達の中学校は優勝した。二年の時は準優勝で悔しい思いをしたが、翌年は余裕を持って優勝出来た。

喜一はエースで、四番バッターとして優勝に貢献した。留吉も主将でチームの要になつて活躍した。徳治も優勝戦で勝っていた九回の表、最後の打席でピンチヒッターとして打席に立ちヒットを打つて面目を果たした。監督の優しい心遣いだった。

野球部には入らなかつたが、一典は留吉とは家が近かつたせいもあり親しい関係が続いていた。華奢に見える一典は頑張り屋で勉強も出来た。絵が上手く、才能もあつた。留吉と一典は終生親友としての歩みを始めてい

た。

留吉は中学でも成績は常にトップグループに位置し、生徒会の会長にも例外的に二年の時選挙で選ばれた。補佐に一典を指名して、手伝って貰った。学校では学芸会や運動会を生徒の自主性に任せ、かなり自由に生徒の判断で決める事が出来た。

ひょうきんな徳治が運動会で仮装大会を提案し、留吉の学年はその案に乗る事にした。各クラス趣向を凝らし、生徒の投票で優勝を決めた。「弁慶」の仮装を決めた隣のクラスでは、それを耳聴く聞きつけ「牛若丸」で対抗した。「イワシの集団」という仮装を徳治のクラスは彼の独断で決めた。全員が参加したというだけで、頭に被った紙製の魚はイワシだかサバだか区別が付かなかった。ばかばかりしくて一番笑いはとれた。先頭では徳治が颯爽とイワシの真似して泳いでいるつもりだが皆何のことか理解出来なかった。それでも

特別賞が与えられた。全員参加で、運動場を一番広く使ったというのが受賞理由だった。

徳治は二年まで留吉と同じクラスだったが、彼に変化が出て来たことを留吉は敏感に感じていた。それまで平気で嘘をついていた徳治が、例えば自分が不利になっても、今までみたいに嘘を付いて言い逃れすることが無くなっていった。留吉は喜ばしく思ったが誰ともそのことは話題にしなかった。中学も三年くらいになると、何となく勉強が出来る子は出来る仲間で集団を作るようになり、出来ない子は肩身の狭い思いをするところが多かった。だが、留吉の仲間は別だった。むしろ成績の悪い徳治がいつも仕切っていた。誰もが徳治の顔を立てていた。徳治は小柄なのに自分より大きい茂夫を従わせていた。信用は無いが、どこか憎めないところに徳治の魅力があったのだろう。歌が抜群に上手く、流行り歌は誰よりも先に覚えていた。

中学を卒業すると、喜一と秀人は工業高校へ入学し、高校卒業後は名のあるノンプロチームに誘われ、そこで活躍した。勉強も出来た文雄は野球の強い商業高校を出た後、関西の大学に野球特待生として招かれた。徳治は知り合いの洗濯屋に中学を卒業すると就職した。茂夫は中学を出ると親と一緒に漁船に乗り、遠洋漁業に従事した。辰男と昇は私立高校に進学した。その野球部で中心選手として活躍したと徳治から留吉は後に聞かされた。

一典と留吉は公立の名門高校に入学した。公立中学卒業生の一割程度しか入学出来ない難関の受験校だった。小学校四年生で優勝した留吉の野球仲間はそのそれぞれの道へ進み、そしてそれぞれの人生がその後待っていた。留吉は高校では野球部に入らなかつた。

家が貧しい留吉は中学を出ると就職を覚悟

していたが、相談した吉川教師に高校進学を強く勧められた。自分が学費を出してもいいと教師の吉川は言ってくれた。

留吉の家では親はもとより、兄達も留吉の進学に協力してくれた。種田家で生まれた希望の星を何とか自分達で支えたいと、吉川教師の申し出を丁寧に断り、その後大学卒業まで面倒をみてくれた。留吉は、本当は家族に愛されていたのをその時実感した。心から有難いと親と兄達に感謝した。

教師の吉川は小学校卒業後も留吉達を快く受け入れ、特に留吉は吉川の本を借りに繁々と家を尋ね、高校卒業までに教師の持つ日本文学全集を読破した。また、世界文学全集も殆ど読んでいた。

吉川教師の家は歩いて行くには少々遠かったが、バス代節約と運動のため留吉は往復歩いて通った。吉川がいない時でも夫人は親切に対応してくれ、時にはご飯もご馳走になった。夫妻は家族の一員として留吉や一緒に行った、かつての教え子達をいつも温かく迎えてくれた。

子供の居ない吉川夫妻は留吉達をわが子のように扱ってくれた。茂夫は漁から戻ると時折魚を届けるそうだった。

正月には先生教師の家へいつからか皆が集まるようになり、いつも徳治の仕切りで盛り上がった。留吉は大学に入り、故郷を離れても正月には吉川教師の家で皆に会えた。年に

一度の楽しみだった。

ある年の正月、芙美子の話題になった時、吉川教師はかしこまった口調で話し始めた。

「皆にまず謝りたい。実は芙美子は四年の終わりに血液の病気が見つかり、専門医のいる病院に入院のため引越した。芙美子にも親は詳しく説明してなかったそうだが、半年程の入院の後亡くなったとお母さんから手紙が来た」

そこまで聞くと留吉達は手にしていた盃を置いた。ざわついていた席が一瞬にして静まった。留吉にも芙美子から一度手紙が来たが、病気の事は何も書いて無かった。留吉が書いた返事にはその後何にも応えが無かった。

「長いこと黙っていて申し訳なかったが、今まで皆に伝えることが出来なかった。許して欲しい」

教師の説明を留吉はその時すでに知っていたような気がしていた。顔色が透き通るよう

に白かったのは病気のせいだったのだろう。
山に登った時の息切れもそのせいだと思っ
た。元氣に見えた芙美子が本当は必死に生き
ていたのだった。もしかしたら本人も大変な
病気だと気が付かいていなかったのかもしれ
ないと留吉は思った。

徳治が場を取り持つように「皆で献杯をし
よう」と言ってくれた。皆がそれぞれに杯を
傾けながら芙美子の思いに無言で浸った。

胸に空いた空洞は埋めることは出来ない
が、そこから派生した思いはより強く、そし
て長く留吉の中に留まっていた。

「多分いつか会えるよね」と書いた芙美子は既に居ないが、留吉が生き続ける限り芙美子と過ごした日々は色褪せないで今でも留吉の中に残っている。

吉川教師が亡くなった後も故郷に帰った時留吉は未亡人に会いに行った。今では還暦直前に突然倒れた徳治も鬼籍に入っていた。出合いがあつて、そして別れが来るのは世の常だろうが、留吉には悲しみよりも大きな思い出としてそれぞれが残った。

これから先、留吉には自分がどこへ向かうのか見当もつかなかったが、何となく人生をやり終えたという実感は退職の日が近づくと共に大きくなった。両親を見送り子供たちが成人した今、留吉には確とした残り人生の計画は無かった。こんな時芙美子なら何と云うか聞いてみたかった。

用意された第二の就職先を断り、留吉はまず故郷の山へ行くことを計画していた。一流

と言われている大学を出て、一流と言われている会社に入れたのも芙美子のお陰だと留吉は未だに信じていた。

今は芙美子と並んで座った楠木のふもとを真っ先に尋ねたかった。一緒に泳いだ湖も見なかった。

「イソップ物語」は古くなって紙も黄色くなっていたが依然として留吉の宝物だった。そこには芙美子からの大事な二通の手紙も挟まれていた。

数か月後に迫った引退の日が、留吉にとっては待ち遠しかった。

本と手紙を持って子供の日々に旅するのが留吉の定年後の第一の望みだった。

もしかしたら、あの楠木の下で芙美子の声が聞けるかもしれない、と留吉は期待した。

終わり